ビスケットとお猿さんのお話

武田雪夫

さあ、これは、ビスケットとお猿さんのお話ですよ。

ある公園に、動物園がありました。

まあ、今日は、ほんたうによいお天氣ですこと。でも、今日は、日曜日でも何でもない日ですから、動物園にも、見に來てゐる人があまり大ぜいありません。

まだ幼稚園にも行つてゐない。小さな坊ちやんやお孃さんが、お母さまたちと一しよに來てゐます。それから、髪の毛の長い畫家の小父さんが、けものや鳥の畫を描きに來てゐます。それから、どこかのお爺さんやお婆さんが、ゆつくりゆつくり歩いてゐるだけです。

ですから、動物園のお猿さんたちも、今日は、誰も、おいしいものを投げてくれませんから、

「あゝ、つまらない、つまらない。ほんとに、つまらない。」

さう言つてゐました。

さうすると、その時、誰か、チョコ〳〵チョコ〳〵歩いて來ました。まあ〳〵、かはいゝ小さな坊ちやん

なんだ、ささやかな月めくりなんだ。なのにお正月菓子は菓子屋のこと、じぶん達は親のこと、まんなかはいつもいっぱいだった。

「ハモ、ハモ、ハモ」

「ハモ、ハモ、ハモ、ハモ、ハモ、ハモ、ハモ。」

ぶつぶつ言いながら、ハモ、ハモ、ハモ、ハモ、ハモ、ハモ、ハモ。

それは大よろこびでした。ビスケットが、金網の中へ入らなかつたのに、ちやんと中へ入つたつもりです。

「オチャルチャン、タベタ、タベタ。ビスケット、オイシイ、オイシイッテ。」

さう言つて、かけ出して行きました。むかふの孔雀のゐる金網の前に立つてゐる、お母さまのところへ、かけて行きました。そして、また、さつきと同じやうに、

「オチャルチャン、タベタ、タベタ。ビスケット、オイシイ、オイシイッテ。」

さう言ひました。

お母さまは、孔雀の羽根が、餘りきれいなので、うつかり、そればかり見てゐて、坊ちやんの方は少しも見てゐませんでしたから、坊ちやんが、ほんとに上手に、お猿さんにビスケットを上げたのだと思ひました。それでお母さんも、にこ〳〵して、

「まあ、さう、えらかつたわね。さう、おいしい〳〵つて食べたの。よかつたこと。」

さう言ひました。そして、今度は坊ちやんのお手々をひいて、あのくちばしの大きなペリカンの方へ行つてしまひました。

さあ、こちらの金網の中のお猿さんは、小さな坊ちやんが、せつかくおいしいビスケットを投げてくれたのに、コチンと金網にぶつかつて、外へ落ちてしまひましたから、食べることが出來ません。

どうかして、取れないでせうか。お猿さんは、手を出して拾はうと思ひました。金網の一ばん下の金の棒

の下に、少しすいてゐるところがありました。お猿さんは、そこから片方の手を出して見ました。でも、まだ〳〵とてもとゞきません。

「ウン、ウン。」と、うなつて、力一ぱい手をのばして見ましたが、だめです。もう一本お手々をつながなくては、とゞかないでせう。

そんなに遠くに落ちてゐるのでは、どうしても取れませんね。お猿さんは、手を引つこめて、キョロ〳〵と、ビスケットを見てゐました。そして、お猿さんは考へました。

「あゝ、さうだ、さうだ。誰か來たら、拾つて下さいなつて、たのむことにしませう。」

さう思つて、お猿さんは、誰かそこを通りかゝるのを待つてゐました。すると、そこを、どこかのお婆さんが、ゆつくり〳〵歩いて通りかゝりました。お猿さんは、いそいで、

「お婆さん、お婆さん、そのお菓子を拾つて下さいな。」

さう言つたつもりでした。けれども、お猿さんの言ふことなど、お婆さんにはわかりません。たゞ、こんな風に聞えました。

「キイ、キイ、キャッ、キャッ、キイ、キャッ、キャッ。」

お婆さんは、びつくりしました。お猿さんの前を通ると、いきなり、お猿がないたのですもの、ほんとにびつくりして、

「おゝ、いやな、エテだこと。まあ、氣味の悪い聲を出したりして。」

さう言つて、いそいで向ふへ行つてしまひました。エテといふのは、やはりお猿といふことです。

お猿さんは、そんなことは少しもわかりませんから、

「あれ〳〵、何て變なお婆さんなのでせう。」

さう思ひました。

すると、こんごは、そこへスイ〳〵と、一ぴきのとんぼさんが飛んで來ました。その赤い小さなとんぼさんは、ずゐ分遠くから飛んで來たので、くたびれてゐたのでせう。そこに、ビスケットが一つ落ちてゐるのを見つけると、

「あゝ、これはよいお腰かけだこと。ごら。一休しませう。」

さう言つて、ビスケットの上にとまつて休みました。

それを見ると、お猿さんは大よろこびで、

「あゝ、とんぼさん、とんぼさん。おねがひだから、その、ビスケットを、もう少しこちらへ持つて來て下さいな。」

さう言ひました。すると、とんぼさんは、びつくりして、大きなお目々をグル〳〵させながら、

「まあ〳〵、私には、こんな大きなものは、とても持てませんわ。まあ、ごらん下さい。わたしの足は、こ

んなに細いんですもの。でも、よいことがありますよ。ちよつとお待ちなさいな。」

さう言つて、スイ〳〵とむかふへ飛んで行きましたが、すぐに歸つて來て、

「お犬さんを、たのんで來ましたよ。」

さう言ひました。ほんとに、すぐ後から、一ぴきのお犬さんが來ました。そこで、とんぼさんが言ひました。

「あのね、お犬さん、このビスケットを、お猿さんが、もつと、そばへよこして下さいつて。おねがひしますわ。」

さうすると、お犬さんは、すぐにそのビスケットをお猿さんのそばへ、よせて上げようと思ひました。でもお犬さんは、私たちのやうにお手々で、物を持つことが出來ません。ですから、ひよいとお口に咥へて、お猿さんの方へ寄せて上げようとしました。

すると猿さんは、白い齒を、むき出して、キイ〳〵こないて怒りました。きつと、お犬さんが、そのビスケットを食べてしまふのだと、思ひちがひをしたのです。

お犬さんは、おごろいたでせうね。えゝ、えゝ、びつくりしましたとも。ほんたうに驚いて、ビスケットを捨てると、むかふへ走つて行つてしまひました。

それを、どこかの小父さんが、はじめから見てゐました。小父さんは、落ちてゐたビスケットを、ステッ

キで、お猿さんの方へよせてやりました。

それから、お犬さんが、何だか大へんかはいさうになりましたから、手に持つてゐた袋の中から、おせんべいを一枚出して、お犬さんの方へ投げてやりました。お犬さんは、よろこびましたよ。小父さんの投げて呉れたおせんべいを、

「ごうも、ありがたう、ボリ、ボリ、ボリ。あゝ、おいしい、おいしい、ボリ、ボリ、ボリ。」

さう言ひながら食べてゐました。

こんぼは、お菓子は食べませんから、お池の方へ、スィ〳〵こ飛んで行きました。

あれ、お猿さんが、ビスケットをおいしさうに、モグ〳〵食べてゐます。きつこ、金網の下から手を出して、上手に拾つたのです。

それでは、これで、このビスケットこお猿さんのお話は、おしまひです。